

馬産地ライター村本浩平の 2021 スタリオンシリーズ競走種牡馬名鑑

Vol. 3 | 8.10[火] ▶ 9.23[木・祝]開催分



8.11
[水]

アメリカンペイトリオット賞
【フルールカップ〔H3〕】

初年度産駒
デビュー

繋養先の米国だけでなく、世界各国で活躍馬を送り出しているWar Front。その本邦初の後継種牡馬となったのがアメリカンペイトリオットである。現役時の成績は14戦5勝ながらも、デビューから一貫して芝のレースを使われており、初重賞制覇となったGⅢセントSはトラックレコードで勝利。GI制覇を果たしたGIメイカーズ46マイルSでは、後方からの差し切りで勝利と、卓越したスピード能力を証明した。日本には2018年シーズンから繋養。その血統背景だけでなく、芝適性の高さも評価される形で、繋養初年度から154頭の繁殖牝馬を集めた。初年度産駒は本年度デビュー。メイクデビュー中京に出走したブレスレスリーが、この世代の新種牡馬では第一号となる中央初勝利をあげている。

8.12
[木]

シルバーステート賞
【エトワール賞〔H3〕】

初年度産駒
デビュー

現役時の競走成績は5戦4勝。しかも重賞は未勝利。にもかかわらず、シルバーステートが繋養初年度から191頭の繁殖牝馬を集めた理由は、「未完の利器」との称号が相応しい、その競走成績にある。屈腱炎にさいなまれながら、現役時は2度に渡ってレコードを樹立。また、引退時は500kgに迫る雄大な馬格も、生産者の評価を高めることとなった。セリ市場での評価だけでなく、今年の春先には注目の2歳馬として名前が挙がってきた産駒もいた中で迎えた新馬戦では、中央、地方の双方から次々と勝ち馬を輩出し、ファーストシーズンサイア争いの首位に躍り出る。しかも、今年のセレクトセール1歳セッションに上場された、ギエムの2020(牡)は、激しい競り合いの結果、2億6千万円という高い評価を受けた。種牡馬としては「大器早成」のスタートを切ったと言える。

8.26
[木]

パイロ賞
【サッポロクラシックカップ〔H2〕】

今の地方競馬のみならず、生産界にとっても無くてはならない存在となった種牡馬。それがパイロと言えるだろう。現役時にGIフォアゴースなどダート重賞で4勝をあげたパワーと闘争心は産駒へ確実に遺伝され、日本でもダートを中心に勝ち馬を量産していく。JpnⅡ名古屋GPを勝ったデルマルーヴルなど、産駒は地方重賞で活躍を見せていく中、中央では唯一の芝の重賞馬となったビービーバーレル(GⅢフェアリーS)に続き、ケンシンコウもGⅢレパードSを優勝。世代を問わない産駒の活躍もあって、ダートサイアールランキングでは毎年のようにトップ5入りを果たしている。セリ市場でも産駒たちは活発な取引が行われており、種牡馬としての人気もまた、衰えることを知らない。

9.2
[木]

イスラボニータ賞
【リリーカップ〔H3〕】

初年度産駒
デビュー

カネヒキリ、キンシャサノキセキ、ダノンシャンティなど、外れ無しと言えるフジキセキの後継種牡馬の中でも、真打と言える存在がイスラボニータと言える。6月のメイクデビュー優勝から、一気にGI皐月賞制覇へと駆け上がっていった完成度。その後も6歳のGⅡ阪神Cまで息の長い活躍を続けただけでなく、そのGⅡ阪神Cでは2歳時のGⅢ東スポ杯2歳Sに続くレコードを樹立。仕上がりの良さ、丈夫さ、そして卓越したスピード能力と、種牡馬として成功するセールスポイントを幾つも兼ね備えており、繋養初年度から170頭もの繁殖牝馬を集めたのも頷ける。今年、デビューを果たした初年度産駒では、メイクデビュー福島をニシノレバンテが優勝。プルパレイは2歳未勝利戦をレコードで勝利している。

9.9
[木]

ブラックタイド賞
【旭岳賞〔H2〕】

ディープインパクトの兄でもあるブラックタイドは、今年で20歳。種牡馬入りしたのは2009年シーズンからと、弟よりも3年遅いスタートとなったが、毎年のように中央での重賞馬を送り出しながら種牡馬成績をあげていく。2015年にはキタサンブラックが菊花賞を優勝してGI馬の父となると、その後も引退までにGI7勝をあげたキタサンブラックが牽引する形で、2年続けて中央リーディングサイアールのトップ10入りも果たす。産駒は芝のみならず、ダートでも優秀な成績を残しており、また障害でもタガノエスプレッソが重賞2勝をあげているように、バラエティに富んだ活躍を見せている。近年の種付け頭数は落ち着いた感もあるが、血統的に再びGI級の産駒が現れても不思議ではない。

9.16
[木]

シャンハイボビー賞
【イノセントカップ〔H3〕】

近年、種牡馬として必要不可欠となった仕上がりの良さやスピード能力、そして、現在の生産界においてアウトクロスを作りやすい血統構成と、全てを備えた種牡馬がシャンハイボビーである。自身は現役時に8戦6勝ながら、そのうちの5勝は全て2歳時にあげており、GIシャンペインSで初GI制覇をあげたかと思うと、GIBCジュヴェナイルとデビューも優勝。その年のエクリプス賞最優秀2歳牡馬にも選出される。2014年から米国で種牡馬入りすると、米国のファーストシーズンサイアールランキングで4位となっただけでなく、シャトル先となったブラジル、そしてチリでもGI馬を立て続けに送り出す。日本では2019年シーズンから繋養。その年には108頭の配合を行っている。

9.22
[水]

タリスマニック賞
【フローラルカップ〔H3〕】

一度、その顔を見たら忘れられないような大きな流星と、ハイソックスを履いているかのような四白の脚。その見た目の派手さだけでなく、現役時にはGIBCターフを優勝。GI香港ヴァーズでも2着となるなど、世界四か国で重賞を沸かせてきた実績も相成って、海外のファンも多いのがタリスマニックである。父Medaglia d'Oro産駒の中でも芝の中長距離で安定した競走成績を残してきたが、その源となっているのが、ディープインパクトやレイデオロにもその血を伝えるHighclereの牝系とも言える。産駒には父と同様に芝のクラシックディスタンスでの活躍が見込まれており、牝系クロスが更なる爆発力をもたらすのかもしれない。繋養初年度、2年目と100頭を超える繁殖牝馬を集めている。

9.23
[木・祝]

ミッキーアイル賞
【ウポポイオータムスプリント〔H2〕】

初年度産駒のメイケイエールがGⅡチューリップ賞など重賞を3勝。デュアリストはJpnⅡ兵庫ジュニアGPを優勝と、芝とダートの双方から重賞馬を送り出したのがミッキーアイルである。産駒は現役時にGI2勝をあげた父を彷彿とさせる、先行力のあるスピードが遺伝されており、昨年のフレッシュマンサイアールランキングで5位となったように、仕上がりの早さも申し分ない。群雄割拠しつつあるディープインパクトの後継種牡馬でも、芝の短距離部門を一手に引き受けていく存在となっていくそう。母父は日本でも繋養された、世界的な名馬ロックオブジブラルタル。その血統背景も相成って、2017年から3年連続でシャトルサイアールとなり、シャトル先のオーストラリアでも人気を集めている。

今シーズンは特別競走17レースも
「スタリオンシリーズ競走」として開催!

●門別9回 ●エスケンデレヤ賞

「スタリオンシリーズ競走」は、一般社団法人JBC協会(ジャパンブリーダーズカップ協会)が産地の支援を得て、優勝馬の馬主や生産者に種牡馬の翌年種付権利を副賞として贈呈する競走です。

※生産牧場が海外の場合は付与対象外となります。

